

多文化共生の実現を目的とした国際交流の実践†

—留学生は日本人学生との小学校クラブ活動企画を通して何を学んだか—

服部 明子*・林 朝子*

三重大学教育学部*

本稿は、三重大学教育学部日本語教育コース科目「人間発達実地研究 V」において行った、多文化共生をテーマにした小学校クラブ活動企画とその実践について報告するものである。授業では、留学生と日本人学生がともに履修し、協働的学習が行われている。本稿では、日本人学生と留学生のうち、後者の留学生に焦点を当て、14名のレポートを通し、(1)大学の国際化、(2)地域における多文化共生、(3)学校現場における国際教育の促進の3点から、本取り組みの意義と貢献について考察する。

キーワード：多文化共生、協働的学習、留学生、日本人学生、小学校クラブ活動企画

1. はじめに

本稿では、三重大学教育学部日本語教育コース科目「人間発達実地研究 V」における取り組みについて報告する。

「人間発達実地研究 V」は、教育学部で平成18年度から毎年後期開講（平成28年度は不開講）の授業科目（2単位）である。授業の目的は、学生に、教育（日本語教育、学校教育）現場で必要となる、外国人児童生徒の現状や課題、多文化共生に関する知識を実体験と結びつけることで定着させることである。そのために、授業では、受講生が主体となり、多文化共生をテーマにした小学校クラブ活動の企画・実施によって、国際交流を実践している。受講生は、日本語教育コースに所属する日本人学生（1年生）が大多数であるが、例年、数名の教育学部に所属する留学生も履修している。

林・服部（2016）では、教員免許取得予定の日本人学生が、学校における多文化共生に対してどのような意識をもつようになったかを、学生のレポートから明らかにした。

本稿では、留学生に焦点を当て、(1)大学の国際化、(2)地域における多文化共生、(3)学校現場における国際教育の促進という3点から、本取り組みの意義を捉え直したい。次節以降で示すように、それぞれの点と留学生への教育を関連づけた研究は以前からなされてきた。しかし、留学生への教育実践をこれらの複合的な視点から捉えたものは管見の限り、見当たらない。以上の3点は、現在だけでなく将来的にも日本の教育に関する大きな課題であり、複合的に捉えられることが今後さらに必要になることが予想される。「人間発達実地研究 V」にお

ける実践の検証を行うことにより、(1)大学の国際化、(2)地域における多文化共生、(3)学校現場における国際教育への寄与を目指したい。

第1節では、以上の3点と留学生との関わりについて述べる。第2節では、本取り組みの概要を示し、第3節以降は、26年度と平成27年度に履修した留学生のレポートから、留学生が何を学び、どのような貢献があったのかを考察する。

1.1 大学の国際化

平成20年、文部科学省と関係省庁（外務省、法務省、厚生労働省、経済産業省、国土交通省）によって、「留学生30万人計画」が策定された。2020年度を目途に、留学生30万人の受入れが進められている。「留学生30万人計画」は、日本のグローバル戦略展開の一環として位置づけられており、大学等のグローバル化を推進するねらいがある。また、2025年までを視野に入れた、長期戦略指針「イノベーション25（平成19年6月1日閣議決定）」において、大学には、新たな価値や社会の変化を生み出す役割が期待されており、その方策のひとつとして、海外との交流の充実が挙げられている。

大学の国際化の動きを受け、高等教育機関では、留学生と日本人学生が同じ授業を履修するクラスが開講されている。こうしたクラスは、「多文化クラス」、「混合クラス」などと呼ばれ、「共修」が期待されている。「共修」とは、末松（2014）が言うように「言語・文化背景の異なる学生同士が知的交流を通して互いを理解し、己を見直し、最終的に新しい価値観の想像を自己成長へとつな

げる」ための協働的な学習の機会と捉えられる。

大学の国際化を進める上で、留学生は貴重な人的資源といえる。日本人学生にとっては、留学生と接することで多様な文化や価値観に触れ、国際的な視野を養うことにつながる。一方、留学生には、将来的に母国と日本の関係構築に寄与する人材に成長することが期待される。留学生は日本留学において、よりよい教育が享受できることが重要であるが、専門分野の知識や技能を身に付けるだけでなく、日本社会や文化を理解することが必要であると考えられる。

1.2 地域における多文化共生

「多文化共生」の実現が、日本社会に求められている。野山 (2008) は、「多文化共生」とは、外国籍住民が多く集住する自治体や地域等で広がった表現であると指摘している。近年は、留学生も地域で生活する住人であると捉えられるようになってきている。「多文化共生」の定義はさまざまであるが、日本に長期的に滞在し、地域で生活する外国人と日本人がともによりよい社会を築くという理念で用いられる。本稿では、「多文化共生」を「異なる文化を持つ人々と共に生きていこうとすること」とし、「共に生きていこうとすること」には、具体的な活動、態度が含まれるものとする。

独立行政法人・日本学生支援機構発刊の『留学交流』では、2014年3月号から、年1回の特集テーマに「多文化共生社会」が取り上げられ、留学生と多文化共生社会に関する報告がなされるようになった。長谷部 (2014) は、留学生と多文化共生社会の関わりについて、留学生も日本に長期滞在し、地域で生活をする者であり、地域で行われる国際交流に参加するという側面があり、地域での交流の場への参加は、日本社会への参加と貢献を留学生自身に感じてもらうことができると指摘している。

現在、留学生と地域との交流の取り組みはさまざまな場所で行われている。留学生も地域で生活する住人の一員であることに加え、日本社会を理解してもらうためには、地域との交流が欠かせないという認識が今後さらに深まるものと思われる。

1.3 学校現場における多文化共生と国際教育

学校現場では、日本人児童生徒と外国人児童生徒が席を並べ、ともに学ぶ機会が増加している。外国人児童生徒のなかには、日本語の運用能力が十分でない児童生徒がいる。「日本語指導が必要な児童生徒の受入れ状況等に関する調査 (平成 26 年度、文部科学省)」によると、三重県内で公立学校に在籍する日本語指導が必要な外国人

児童生徒数 (学校数) は、小学校が 1,213 名 (139 校)、中学校 464 名 (60 校)、高校 222 名 (9 校)、特別支援学校 21 名 (6 校) である。

平成 20 年に示された「外国人児童生徒教育の充実方策 (報告)」では、外国人児童生徒を受け入れる意義として、外国人児童生徒と日本人児童生徒が共に学ぶことで、「異なる文化を持つ人々と共に生きていこうとする態度」が育まれることが挙げられている。これは、1.2 で示した「多文化共生」の理念に通じるものである。

こうした外国人児童生徒の受入れに加え、社会全体の国際化にともなって、学校現場での国際教育の取り組みも必要とされている。「国際教育」とは、「国際社会において、地球的視野に立って、主体的に行動するために必要と考えられる態度・能力の基礎を育成する」ための教育 (文部科学省「初等中等教育における国際教育推進会議報告 (平成 17 年 8 月 3 日)」) である。その基本的な理念・視点は、「異なるものや異なることへの理解」、「多様性の受容」、「共生」などとされている。国際教育は、「子どもたちの身近な課題を子どもたちが実感できる形で取り上げること」が重視される。そのための実践として、学校外の人材を活用し、海外からの留学生を派遣する取り組みが行われており、富山 (2014) や稲葉 (2015) などの報告が見られる。

なお、学校現場をとりまく現状は、学校教員養成の課題と連動している。国際教育については、教員養成段階で、基礎的・基本的な知識や理解を得ることが求められている。「教職課程の質保障等に関するワーキンググループ (文部科学省)」においても、児童生徒の教育の担い手である全教員が「グローバルなものの見方を身に付ける」必要があるとされ、教職を目指す日本人学生が大学内で留学生との交流を行うことなどが推進されている。

2. 本取り組みの概要

本節では、取り組みの概要を示す。まず、三重大学教育学部日本語教育コース科目「人間発達実地研究 V」について述べる。第 1 節でも述べた通り、目的は、教育 (日本語教育、学校教育) 現場で必要となる、外国人児童生徒の現状や課題、多文化共生に関する知識を定着させることである。多文化共生をテーマにした小学校のクラブ活動で、留学生と日本人学生が企画した国際交流の実践を通して、協働的な学習を行うことで、目的の達成をはかる。

授業は、教育学部教員 3 名が協働して担当する。3 名の内訳は、日本人教員 2 名、中国人教員 1 名である。3 名とも、海外で長期間、日本語教育に携わった経験を有

する。授業内容はおもに3つから構成される。第一は、担当教員による講義である。講義は、外国人児童生徒と学校の現状と課題を理解するための基本的な知識を教授するものと、中国の文化を紹介するものである。第二は、受講生全員が個人で、テーマをみつけ、留学生（中国、ベトナム、タイ、韓国など）の国と日本の文化を比べ、発表する。さまざまな文化に触れることや認識すること、学生自身が主体的にテーマを見つけることが目的である。第三は、三重県津市のA小学校「世界を結ぼうクラブ」に受講生が参加し、受講生たちでクラブ活動の企画と実施を行う。第一と第二の内容は、第三の小学校のクラブ活動の企画・実施につなげるためのものであり、本取り組みの柱である。

平成26年度は、20名（日本人学生1年11名、中国人留学生6名、ベトナム人留学生2名、タイ人留学生1名）、平成27年度は、16名（日本人学生1年10名、中国人留学生5名、韓国人留学生1名¹⁾）が受講した。留学生の日本語能力は、日本語能力試験N1からN2程度であるが、個人により運用能力は異なる。

以下、2.1では、小学校のクラブ活動の概要を示し、2.2では、受講生が実際に行った活動内容を示す。

2.1 「世界を結ぼうクラブ」

三重県津市のA小学校には、外国人児童生徒が常時数名在籍しており、外国人児童生徒の教育や多文化共生につながる活動に長年取り組んでいる。平成20年度からは、クラブ活動（4年生以上対象）に「世界を結ぼうクラブ」が加わった。様々な文化を知り、認め合い、友達関係作りへとつなげていくという目標を掲げ、「世界には様々な国や文化があることを知るきっかけを作ること」、「母国の文化や習慣を知り、アイデンティティ確立の一助となること」、「わかったことや知ったことを学校の友達に発信すること」につながる活動が行われている（林・服部2016）。

平成26年度は、日本人児童8名、外国人児童2名が参加し、平成27年度は、日本人児童が14名参加した。小学校クラブ担当教員数は平成26、平成27年度ともに2名であった（表1）。

表1 「世界を結ぼうクラブ」参加者

	平成26年度	平成27年度
児童	4年生10名（うち、1名は日系ブラジル人児童、1名はオーストラリア人児童）	14名（6年女1名、4年女1名、4年男12名）

受講生	20名（中国人留学生6名、ベトナム人留学生2名、タイ人留学生1名、日本人学生1年11名）	15名（中国人留学生5名、日本人学生1年10名）
小学校教員	2名	2名
大学教員	教育学部教員3名（日本人教員2名、中国人教員1名）	教育学部教員3名（日本人教員2名、中国人教員1名）

2.2 活動の企画と実施

平成26年度、平成27年度ともに、受講者は、2つのグループに分かれ、1回ずつ企画を行った。活動の概要を表2に示す。

なお、表2内の〈レポート〉とは、クラブ活動後に受講生それぞれが1週間以内に気づいたことや学んだことについてふりかえりを行い、それをまとめたものである。このレポートは、受講生の学びを深める一助とするために課したため、字数制限は設けなかった。

表2 「世界を結ぼうクラブ」活動の概要

	平成26年度	平成27年度
クラブ見学	<ul style="list-style-type: none"> ・12/1 世界のじゃんけん（小学校教諭担当）（於：小学校）〈レポート〉 ・12/8 見学のふりかえり（於：大学）〈レポート〉 	なし
クラブ企画、実施①	<ul style="list-style-type: none"> ・1/26「中国の小学生・李華さんの一日を通して中国を学ぼう」（於：小学校）〈レポート〉 	<ul style="list-style-type: none"> ・11/30「のぞいてみよう！中国のお正月」〈レポート〉 ・12/7 実施のふりかえり（於：大学）〈レポート〉
クラブ企画、実施②	<ul style="list-style-type: none"> ・2/16「いろいろな国について知ろう！ワールドバスケット」（於：小学校） 	<ul style="list-style-type: none"> ・1/25「世界のスポーツを知ろう！！」〈レポート〉 ・2/1 実施のふりかえり（於：大学）

ここで、クラブ活動の実施状況について、補足しておきたい。表2からも分かるように、クラブ見学、クラブ企画・実施の予定は、年度ごとに異なっている。たとえば、平成27年度は、クラブ企画を実施した後、そのふり

かえりを行った(12/7, 2/1)が、平成26年度はふりかえりを行っていない。平成26年度は、後期授業終了後の2月16日に活動を行った。これは、毎年、大学の授業予定と小学校の行事予定をあわせて調整する必要があるためである。また、クラブは、児童が自由に選択できるものであるため、年度によって、児童生徒数にはばらつきが生じる。

次に、クラブ企画の詳細を示す。クラブ活動を実施する前の段階で、平成26年度、平成27年度ともに、それぞれのグループが企画書と授業の教師の発話や進め方を書いた教案をクラス全体に提示し、検討する時間を設けた。企画を担当するグループは、授業時間外で企画の実施に必要な教具や資料を作成するなどした。大学教員は、企画内容と進め方について、随時助言を行い、実施が著しく困難であることが予想される場合に限っては、修正を求めた。ただし、具体的に修正内容を指示するのではなく、問題となることが予想される点を指摘し、受講者本人たちに検討させるよう促した。

【平成26年度】

企画①「中国の小学生・李華さんの一日を通して中国を学ぼう」
(中国人留学生4名、日本人学生5名)

・ねらい：北京に住む3人家族の女の子の一日のクイズを通して、中国について、楽しく知ってもらおう。

・活動(内容・流れ)：〇×クイズ、中国のラジオ体操、中国の学校で行われる目の体操(眼保体操)

企画②「いろいろな国について知ろう！ワールドバスケット」
(中国人留学生2名、ベトナム人留学生2名、タイ人留学生1名、日本人学生6名)

・ねらい：日本の学校でよく行われる遊びを海外の情報を変えて行うことで、日本を含む様々な国のことについて教意味関心を持てる。

・活動(内容・流れ)：日本の学校でよく遊ばれている「フールツバスケット」のルールを基に、日本、中国、タイ、ベトナムについての簡単な情報を知ることができるよう遊び方を工夫したゲームを行う。

【平成27年度】

企画①「のぞいてみよう！中国のお正月」

(中国人留学生3名、日本人学生5名)

・ねらい：中国と日本の正月を比較しながら紹介することで両国の文化をより知ってもらおう。

・活動(内容・流れ)：自己紹介、中国お正月クイズ(グループで正解すると1ポイント、〇×二択もしくは三択)10問、途中で中国の挨拶と新年の挨拶を言ってみるといった活動を入れこむ。最後に中国剪紙(優勝は金の喜字、負けた組も銀の喜字)

を渡す。

企画②「世界のスポーツについて知ろう」クイズ

(中国人留学生2名、日本人学生5名)

・ねらい：世界のスポーツについて知る。

・活動(内容・流れ)：クラスを2つに区切り、〇×の正解だと思っただけで移動する。正解したら、グループの大学生からシールを一つもらう(1ポイント)。名札の横に貼って、最後にポイントが一番多かったグループに景品がある。

3. 分析および考察

本稿では、ショーン(2007)の省察的実践の考えに基づき、留学生のレポートをそのまま用い、(1)大学の国際化、(2)地域における多文化共生、(3)学校現場における多文化共生と国際教育の促進について考察する。

本授業で提出されたすべてのレポートを対象とし、クラブ活動後のレポート(2.2参照)および授業の最終レポートをデータとする。本稿で扱うこれらのデータはすべて、留学生および日本人学生から、研究同意書への署名を得たものである。

以下、隅付き括弧内は、留学生の受講年度、出身国、仮名(A~N)を示す。鉤括弧内がレポートの引用である。下線は筆者によるものである。なお、留学生の日本語表現には誤りもみられるが、修正せず、そのまま示す。ただし、意味が著しく不明確だと思われる部分については、丸括弧内に筆者の補足を加える。引用する各データの文末にはレポートが書かれた時期を山括弧内に示す。

ここで、ショーンの省察的実践と本研究との関連について触れておきたい。ショーンは実践者の「省察」について、「行為の中の省察」と「行為についての省察」の2つの面を挙げている。

「行為の中の省察」は、「行為の最中に驚き、それが刺激となって行為についてふり返り、行為の中で暗黙のうちに知っていることをふり返る(p.50)」ことを意味する。

「記述することが省察を育て、探究者に批評やテストやみずからの知識を再構築することを可能にする(p.295)」と述べられているように、「暗黙的で直観的な知」を言葉で表現すること、つまり、言語化が重要視されている。

また、省察の対象となる行為そのものが「その状況に変化を与えることのできる時間帯の制約を受け(p.64)」、「時間的広がり(p.64)」があるとされている。学生による子どもたちへのクラブ企画実践は、実践の前後にある講義や準備期間の教師と学生、学生同士の細かなやりとり、文献講読等も反映された結果である。よって、本実践では15週にわたる期間は「行為の中」、15週の間で言語化され、提出されたレポートは「行為の中の省察」だ

と捉えられる。

「行為についての省察」は、「実践が終わったあとの比較的静かな時間に、自分が取り組んだプロジェクトについて、過ごしてきた状況について思いめぐらし、事例を扱ったときにどのように理解していたのかを探究する (p.64)」ことであり、学生が実践後に自分たちの実践内容を振り返りながら記述したレポートそのものである。

以上を踏まえ、本研究で取り上げる学生のレポートは、「行為の中の省察」と「行為についての省察」の2つの面を持ち合わせたものとして、分析対象とする。

3.1 大学の国際化

授業の目的と関連しては、次の【H27 中国・M】の意見が見られ、体験を通じた知識の定着という授業の基本的なねらいが達成されたことが示された。

【H27 中国・M】「(授業が)あつという前に終わってしまい、とても残念だった。この授業では、さまざまな理論的な知識を身につけるだけでなく、それらの勉強した理論的な知識をいろんな活動で活かすことができた。」<最終レポート>

【H26 タイ・G】は、受講生同士のグループ活動そのものがさまざまな世界の学生と接することになり、それが「より広い世界を見る」こと、「国際的の考え方」につながったと述べた。日本人学生だけでなく、他の国の留学生と接することにより、学びが深まることが示唆された。

【H26 タイ・G】「今回の活動は日本人と中国人とベトナム人と一緒にグループで活動することである。各国の人は違う考え方を持っているが、(多文化)共生で優しく(優しく)グループ(グループ)で活動を良くできてよかったと思う。タイでの活動と日本でのを比べて、日本での活動は私がより広い世界を見ることができるし、日本人、中国人、ベトナム人の考え方もあるし、新しい知識を学んだ。私は最初のクラスから、最後のまでだんだん良い事を学んでいた。企画したり、議論したり、アドバイスしたりした。特別に、学校で活動している時は多文化共生についてよく見えるようにした。今、私は国際的の考え方をもらえるし、国際的な文化を学んで、受けられる。私は、日本、中国、ベトナムの友人のグループと活動をしたから、この授業は最も面白い授業と思う。この授業を受けるから、様々な事をもらえるし、新しい友達できし、非常に良い経験もってきた。」<最終レポート>

初回のクラブ見学の際には、次のような感想が見られた。【H27 中国・K】は、日本の小学校は、テレビドラマ

やアニメの中で見たが、実際に自分の目で見るができることへの喜びを語り、日本と中国の小学校では、教室の掲示物や床といった建物の構造も異なることについて言及した。【H27 中国・J】も次のように述べた。

【H27 中国・J】「(初めて小学校に見学に行って)留学生として知らない日本文化たくさんある。例えば、小学校に行く時に上履きを用意すべきことが事前に教えてもらえなかったら、そのまま行くかもしれない。準備の段階で日本の文化についてたくさん勉強した。(中略)日本人の小学生と実際に接触する時、性格について中国の小学生と変わらない。元気で可愛かった。(中略)自分が知らない文化を知ることが世界を知ることと同じだと言える。」<11/30 企画①実施後レポート>

日本で生まれ育った日本語母語話者にとっては、当たり前のように感じる「学校文化」も、初めて日本の学校教育現場を訪れる留学生の目には新鮮に映るだろう。

【H27 中国・K】【H27 中国・J】のレポートからは、普段留学生がみることができない日本の小学校、日本の小学生と接することで、自国との違いを認識し、日本への理解を深める様子が伺える。単なる感想に留まらず、「自分が知らない文化を知ることが世界を知ること」であると認識を深めることに至った背景には、本取り組みのねらいのもと、学校を訪問するという活動であったためと考えられる。

また、小学校に在籍する児童から発せられる声のなかには、しばしば、大学内では聞かれない率直な発言もあった。「生徒たちが外国のことについて興味津々に聞いている姿を見て、また、いろいろと留学生である私たちに話すのに感動した(【H26 中国・E】)」という報告もあった一方、平成27年度には、企画①の実施の途中、ある日本人児童が「中国は偽物大陸だ」と中国人留学生に向かって発言するということがあった。

企画①が終了した次の授業(12/7)で、全体でのふりかえりを行った際、日本人学生からこの件に関して議論したいという要望があがり、受講生同士で意見が交わされた。大学教員は、受講生に多角的な視点から考えてみるよう促した。この授業後に提出されたレポートでは、次のようなふりかえりが見られた。

【H27 中国・L】「(子どもの発言に)驚いたと感じたが、面白いとも思った。驚いたのは中国人の学生がいるのをわかっていても正直にそのようなことを話してしまった。面白いと思ったのは、小学生たちは中国のことについてほとんど知らないのに「中国は偽物大陸」のような話を知っている。(中略)私は小学生のときに日本人が怖い

と思っていた。そのとき、日本人と接触したこともないが、自然にそのような観念を持っていた。大学に入って、日本人の先生や学生と接触したり、日本の文化を勉強したりすると、日本人に対してそのようなイメージが変わった。(中略)多文化共生を促進するために、個人としてはどのようなことができるのか。まず、多文化と自分の関係をわかることが重要である。自分はどのような文化のもとで育てきたのか、相手の文化と自分の文化はどのような違いがあるのか。これらのことを知ると、もし「中国は偽物大陸やから」のようなことを言われたら、何も言わずに笑うのではなく、相手に正しい文化をちゃんと伝えることができるだろう。」<12/7 企画①実施のふりかえり後レポート>

L は、子どもの発言を直接受けた、当事者である。L の側にいた日本人学生が児童の発言を即座に否定したのに対し、L 自身は、「何も言わずに笑っただけ」だったと述べた。小学生の発言は、留学生が日常的に大学内で接する教員や日本人学生、他国からの留学生とは異なる、直接的で配慮のないことばで表現されたものであった。児童の発言に、中国人留学生は少なからず傷ついたであろう。しかし、そこで終わらせるのではなく、企画①をふりかえる中で、日本人学生から、議論したいという希望が出され、全員で意見を交換したということが受講生の学びを深めるためには、非常に重要であったと考えられる。全体でのふりかえり(12/7)後のレポートで、L は、小学生と同じ視点に立つことで、自分にできることは何かという結論にたどりつくことができたと考えられる。

さらに、「今回の多文化共生で学んだことをこれからの生活と仕事で活用していきたい【H26 中国・N】」といった、本取り組みを自らの将来像と結びつけた留学生もいた。

【H26 中国・E】「いままで、中国と日本両国の関係はずっとよくない状態だが、それはあくまでもお互いに理解不足のためであると私は感じている。同じアジアなので、さらに両国でもお互いに勉強できる場所がたくさんあり、協力して一緒に進歩したらどれほどうれしいことであろうと時々強く思っている。そのため、小学校だけではなく、中学校、高校、さらに大学にもこのような活動をするのはとても効果がある方法だと考えられる。中国にはまだこのような教育はないが、いつか中国の子どもは日本の大学生または世界の人と交流できるようになるのも分からないが、一日も早く中国の子どもも世界のことを習ってほしいと願っている。私は日本語を勉強した以上、ぜひ中日の架け橋になろうと思ひ。これからもがんばっていきたく思っている。」<最終レポート>

以上の報告からは、本取り組みがグローバルな視点を涵養すること、日本に対する理解を一層深めることに寄与する可能性が認められる。このような視点を心得、日本への理解を深めた留学生は、貴重な人材となることが期待できる。

3.2 地域における多文化共生

平成 26 年度は、クラブ活動に参加した児童のなかに、外国人児童もいた。【H26 中国・C】と【H26 中国・D】のレポートには、外国人児童の姿を自分の姿と照らし合わせる記述が見られた。

【H26 中国・C】「(「世界のじゃんけん」活動で)お父さんがブラジル人の子と一緒にグループになった大学生がその子に「ブラジルのじゃんけんも教えて」と問いかけたところ、恥ずかしそうに「あんまり言いたくないなあ」と言われてしまった。その子は、あまり自分がブラジル人であるということを表に出したくないようであった。(中略)自分が留学生として、こういう体験もよくある。最初に日本に来たとき、もし日本人と何か違いがあったら、やはり不安になる。周りの日本人に合わせるようになりたいという気持ちが強いと思う。大人でさえ気になることなのに、まして子供がなおさらだと考えている。」<12/8 見学のふりかえり後レポート>

【H26 中国・D】「(「世界のじゃんけん」活動は)日本人の子にとってたぶん、「あつ、外国はそういうことか」と感じただけだ。しかし、クラスの中に、外国人の子もいる。その子が感じたことは何だろうか。「自分と日本人が違うか」「日本人は外国人とはっきり区別しているよね」などの不安と疎外感があるかもしれない、子どもだけではなく、大学生である私たち留学生は、日本人と区別される時も不安とか疎外感が感じれる。」<12/8 見学のふりかえり後レポート>

【H26 中国・C】と【H26 中国・D】は、留學生活のなかで、大学教員や日本人学生に、このレポートに書かれたような「不安」や「疎外感」を訴えることはなかった。表面上は、円滑な人間関係を構築しているように思われても、実際は疎外感を感じていたことが分かる。自分と同じような立場の外国人児童と接し、児童をサポートするような機会があれば、それは留学生にとって、ひとつの視点を獲得するだけでなく、社会に貢献しているという自信や安心感をもたらすのではないかと思われる。

また、【H26 ベトナム・I】も「異文化」である日本の生活に「毎日の生活にいつも頑張って、調和している」と述べた。

【H26 ベトナム・I】「ベトナムでは子どもに教える知識は社会常識に限る。(ベトナムの)子どもにとって異文化というのは国内にある53

民族の文化の違いに限るかもしれない。(中略)私の場合で、大学に入るときに、異文化コミュニケーションという授業を受けた。異文化とは何か異文化フィードバックとは何かを勉強し始めた。でも、そういう知識は理論上に限る。留学するときをもって、異文化における問題は始めて分かった。毎日の生活にいつも頑張っ、調和している。(クラスメイトである他の留学生の)皆さんの話から、タイ人と中国人の皆さんも異文化に困ることがあるようだ。留学することのおかげ、自分は誰よりも多文化について深く分かるようになってきた。困ることの一方、世界の友達ができ、様々な文化を接し、人間観が広がって、よかった(よかったの)ではないだろうか。」「<12/8 見学のふりかえり後レポート>

【H26 ベトナム・I】にとって、「毎日の生活にいつも頑張っ、調和している」ことは、ストレスが生じやすい緊張状態であると推察されるが、授業でのふりかえりを通じ、そうした状態は他の国(タイ、中国)の留学生も同様であることを認識したことが分かる。その気づきがかきかけとなり、「世界の友達ができ、様々な文化を接し、人間観が広がって」いくことにつながったことがうかがえる。

来日した留学生は、日本社会への疎外感を感じることはあることは、原田(2006)などによって指摘されている。留学生の疎外感を解消することは、よりよい留学生生活を送ることにもつながる。そのためには、留学生にとって、安心できるコミュニティが周囲にあることが重要である。以上に挙げた【H26 中国・C】と【H26 中国・D】【H26 ベトナム・I】の3人のレポートからは、小学校という日本の地域社会との交流に加え、他国の留学生と日本社会への疎外感やそれに近い感情を交わすことが、留学生の疎外感を和らげる効果があることが認められる。

3.3 学校現場における多文化共生と国際教育の促進

1.3でも示したように、学校現場における児童生徒と留学生の交流は多文化共生および国際教育の点からも進められている。留学生のレポートには、次のような意見が見られた。

【H26 中国・A】「(「世界のじゃんけん」活動で)教師が中国、タイ、ベトナムからの留学生を活用して、児童たちに多文化と接触するチャンスを提供した。児童たちもそのチャンスを使って、ただ本で書いていた異文化の内容を理解だけではなく、生きている異文化を体験することもできる。(中略)子供は国や社会の将来である。もしも児童たちがその授業によって、もっと世界の各ところのことを理解して、自分の視野を広げれば、将来にグローバル人材になりやすいし、もっと国際的な社会を作ることができると思う。」「<12/1 見学後レ

ポート>

【H27 中国・K】「活動が行われている時、クラスの小学生たちは結構活躍して、その中で私たち留学生と話しをする人もいた。べつに複雑な話ではないが、自分と異なる文化のもとで育っていた人と話す勇氣があるだけで、その年の子供にとってはとても偉いと思う。そして特に話しをしなくても、自己紹介のとき自分の班の留学生の名札を見て、「ああ、やっぱり中国人の名前は自分たち日本人の名前と違う」「中国人の中で名前が二字である人もいるね」といったようなことを知るだけでも一種の学習ではないかと考える。このような活動を通して、自分の国が世界の全部ではなくて世界のおいてまだ自分といろいろ違う人・民族・国がたくさんあることが分かるようになれば、外の世界を知りたい意欲も呼び出されることができる。人間の世界観・人生観・価値観は児童時代からだんだんと形成しつつあるものである。だから、小学生時代にこのような授業を受けられ、このような活動に参加できれば、自分の人生にも非常に有益であると思う。」「<最終レポート>

留学生は、クラブ活動が児童の教育にどのように寄与するのかを考えながら、参加していたことが伺える。

また、本取り組みが最も特徴的な点は、留学生と日本人学生が小学校を何度も訪問し、クラブ活動をともに行うことである。以下の【H27 中国・J】【H27 中国・M】のレポートには、多文化共生というテーマのもと、継続的に実践することの重要性が示唆されている。

【H27 中国・J】「小学生を対象とする「多文化共生」教育は達成目標を設定することは必要がないと思う。この授業で文化の知識を暗記し覚えるのは目的ではなく、生徒に他国や他人、自分以外の集団の文化を知らせることはこの活動の趣旨である。(中略)二回目の活動は中国文化から世界文化に広げた。小学生が興味あるそうスポーツをテーマにしたのがいい発想だと思うが、生徒たちがグイズやる途中で、興味がなくなってきた。それはなぜなのか、私の考えはグイズを答えることは生徒自身がテレビのニュースを見て勉強したこととあまり変わらないからだ。グイズの正解を公布した後で、説明をするが、生徒が自発的に知ろうとする意識が生まれず、多文化を知らせるという目的を達成したが、多文化に対する持つ態度は少しでも変わらなかったかもしれない。二回の活動を振り返り見ると、生徒が多文化共生に対する態度を変えるための工夫が必要だと考える。」「<最終レポート>

【H27 中国・M】「(中国と比べて)日本は小学校から異文化交流の授業を作ったのはとても有意義だと考える。他の国・他の文化への理解・受け入れの態度が必要だと思う。小学生たちが相当純粋なので、態度を形成するのは簡単だが、どのような方法で児童の寛容な態度を維持するのは私たち大人の課題である。」「<最終レポート>

これらの【H27 中国・J】【H27 中国・M】の報告が、二回の活動後のものであることに注目したい。国際教育では、「子どもたちの身近な課題を子どもたちが実感できる形で取り上げること」が必要ではあるが、【H27 中国・J】が述べたように、「テレビのニュースを見て勉強したこととあまり変わらない」活動では「生徒が自発的に知ろうとする意識が生まれにくい」こともあるだろう。【H27 中国・M】は、「小学生たちが相当純粋なので、態度を形成するのは簡単」と述べており、その背景には、クラブ活動への参加を通じ、児童が「他の国・他の文化への理解・受け入れの態度」を形成した手応えが得られたものと推測される。しかし、そこに留まらず「児童な寛容な態度を維持する」ことが「私たち大人の課題」であると今後の取り組みについても言及している。【H27 中国・J】【H27 中国・M】のこうした視点は、一度だけではなく、継続的に交流を重ね、クラブ活動を企画し、実践するという一連の体験を通して得られたものだと考えられる。

継続的な実践が留学生の学びに貢献しているということは、裏を返せば、児童の学びを深めることにもつながる可能性があるということである。また、クラブ活動では、児童の眼前で、留学生と日本人学生がともに活動を進めようと努力する姿が展開される。本稿で検証することはできないが、このことによっても児童には、「異なる文化を持つ人々と共に生きていこうとする態度」が、伝わったのではないかとと思われる。

4. まとめと今後の課題

本稿では、多文化共生をテーマとしたA小学校での「世界を結ぼう」クラブ活動における留学生と日本人学生による小学校クラブ活動の取り組みについて、留学生の視点から(1)大学の国際化、(2)地域における多文化共生、(3)学校現場における多文化共生と国際教育の促進の3点から考察した。以下、その結果をまとめ、今後の課題を挙げる。

(1)大学の国際化について、留学生の報告からは、受講生同士のグループ活動、つまり日本人学生のみならず、他国の留学生と接することそのものの意義が挙げられた。新たな価値観が交換、共有されることは、イノベーションにつながる交流の場の創出のきっかけとなることが期待される。また、留学生が日本の小学校を訪問し、日本の小学生と接することは、日本への理解を深めることにつながるだけでなく、自らの出身国に関する理解を得て、新たな視点から学びを深めたことが示された。留学生は自らの将来像を思い浮かべ、それに向かっていくことを決意していた。留学生のレポートからは、本取り組みが

留学生教育を充実させるだけでなく、グローバル人材の育成にも貢献する可能性が示されたと考えられる。

(2)地域における多文化共生については、留学生が日本社会で疎外感を感じやすいというこれまでの指摘と重なる報告がみられた。本取り組みのように、小学校での活動の実施という形で地域との交流を実現させることによって、留学生に社会への参加や貢献の意識を高めることができると考えられる。また、活動を通して、他国の留学生と意見を交わし、不安や疎外感を共有することで、新たな視点や理解を引き出すことができるとと思われる。

(3)学校現場における多文化共生と国際教育の促進については、留学生は、クラブ活動が児童の教育にどのように寄与するのかを考えながら参加していたことが示された。また、単発ではなく、継続的に交流を行うことが重要であることが示唆された。さらに、クラブ活動の内容に加え、児童が留学生と日本人学生が協働してクラブ活動を行う姿を見ることによって、多文化共生社会の理解が促進されると考察した。以下、本取り組みの意義をまとめ、図示する(図1)。

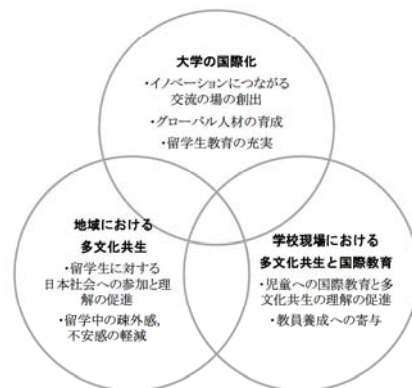


図1 留学生と日本人学生による小学校クラブ活動の意義

最後に今後の課題を2点挙げる。まずは、実践上の困難をいかに解消していくかについて検討を進めたい。2.2で述べた通り、本取り組みは、毎年度、小学校のクラブ活動の日程と大学の授業予定を調整する必要があり、それにもなると、実施時間数や参加児童数が異なる。児童生徒数と受講者数の不均衡が過剰にならないよう、受講者数をある程度制限しなければならない年には、希望者すべてが履修できないこともある。これまで、限られた条件のなかで、よりよい授業になるよう、シラバスを組み立ててきた。今後も状況に柔軟に対応しながら、工夫を重ねたい。

また、林・服部(2016)でも挙げたように、受講生にとって、この取り組みが一時的な学びにならないよう、継

続的に動機づけを促すしくみをつくることが重要である。そのためには、本取り組みで学んだことがさらに深められる機会を設ける必要がある。授業の中でできることには限界があるため、新たなプログラムの開発も視野に、取り組みを続けていきたい。

謝辞 本取り組みは、A 小学校の先生方と児童の皆さんの多大なご支援によって実施することができました。また、本稿で分析対象とした留学生の皆さんからも、こころよくご協力いただくことができました。お名前を挙げることはできませんが、ここに記し、深謝申し上げます。

注

1) 韓国人留学生 1 名は、クラブ企画・実施には参加できなかったため、表 1 の参加者からは除外した。

参考文献

- 稲葉みどり (2015) 「教員研修留学生の小学校訪問の教育的効果の考察」『留学生交流・指導研究』Vol.18,85-99.
- Donald A. Schon(1984) *The Reflective Practitioner: How Professionals Think In Action*. United States, Basic Books) ショーン, D, A. (柳沢昌一・三輪健二監訳)(2007)『省察的实践とは何か—プロフェッショナルの行為と思考』鳳書房
- 末松和子 (2014) 「キャンパスに共生社会を創る—留学生と日本人学生の共修における教授法の確立に向けて—」『留学交流』9月号, Vol.42,11-21.
- 富山謙一 (2014) 「多文化共生社会を生きる—そのための多文化交流の実践について—」『留学交流』3月号, Vol.36, 1-9.
- 長谷部美佳 (2014) 「地域社会で留学生が活動することの意義—日本の多文化共生社会との関連で—」『留学交流』3月号,Vol.36,1-9.
- 林朝子・服部明子 (2016) 「学校における多文化共生の実現に向けた試み—学生の小学校クラブ活動への参加を通して—」『三重大学教育学部研究紀要』第 67 巻, 445-460.
- 原田麻里子 (2006) 「留学生の受け入れにおける自治体の役割と課題—文京区の事例考察から—」『21 世紀社会デザイン研究』(5), 101-113.
- 野山広 (2008) 「多文化共生と地域日本語教育支援—持続可能な協働実践の展開を目指して—」『日本語教育』138号,4-13.
- 内閣府「イノベーション 25(平成 19 年 6 月 1 日)」

(<http://www.cao.go.jp/innovation/>) (2016 年 11 月 17 日)

文部科学省「外国人児童生徒教育の充実方策(報告)(平成 20 年 6 月)」(http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/042/houkoku/08070301.htm)

(2016 年 11 月 17 日)

文部科学省 教職課程の質保障等に関するワーキンググループ(http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/093/093_1/index.htm)(2016 年 11 月 17 日)

文部科学省「初等中等教育における国際教育推進会議報告～国際社会を生きる人材を育成するために～(平成 17 年 8 月 3 日)」(http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/026/houkoku/05080101/all.pdf)(2016 年 11 月 17 日)

文部科学省「大学生等の留学生交流・国際交流の推進」(http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ryugaku/main4_a3.htm)(2016 年 11 月 17 日)

文部科学省「日本語指導が必要な児童生徒の受入れ状況等に関する調査(平成 26 年度)」

(http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/27/04/1357044.htm)(2016 年 11 月 17 日)

文部科学省「留学生 30 万人計画」骨子の策定について(平成 20 年 7 月 29 日)

(http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/20/07/08080109.htm) (2016 年 11 月 17 日)

SUMMARY

This article is report on planning and practice of activities in elementary school on multiculturalism. A collaborative learning lesson with both foreign and Japanese students was conducted as part of a subject titled “Practical Study of School Education V” of the Japanese Language Education Course in Mie University Faculty of Education. In the article, we summarized 14 reports from the participating foreign students and examined the value and contributions of this lesson, to three major topics of: (1) Globalization in higher education, (2) Multiculturalism in the community, and (3) Facilitation of international education in schools.

KEYWORDS: Multiculturalism, Collaborative Learning, Foreign Students, Japanese Students, Elementary School

Club Activity Planning

† HATTORI Akiko* and HAYASHI Asako* :
Multiculturalism-based Collaborative Learning: Through
Elementary School Club Activity Planning by Foreign and
Japanese Students

* Faculty of Education, Mie University 1577
Kurimamachiyachou Tsushi, Mie, 514-8507 Japan